



明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可 毎月一円

本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置
 きあれば其廣告は全國の公衆一
 般に知らるゝ便宜あり

聖語

我も亦これ

世の父

諸の苦患と

救ふ者なり

歳晩の辞

平和約成りて戦火収り、三十八年將に暮れんとす、願れば國家の運命愈興隆の域に進み、國民の使命更に重を加ふ、此時に當つて吾宗教界を如何、無爲寂寞、特に聖門の現狀を然りとす、佛教統一、嗚呼遂に今年も來らず、而して年將に暮れんとす、燈下氣澄んで、感更に深し、伏して

聖祖を想ひ、更に

大聖釋尊を想ふ、

嗚呼國運一轉の時、教界遂に一の東郷平八郎なくして終るべきか、露國既にカボンあり、日本

年將に暮れんとす、大業いまた成らず、嗚呼、四海妙法の日、夫、將、何れの時ぞ、釋尊の大慈

聖祖の大悲を加被せられつゝ、

德薄垢重の身、今に大業を奏する能はず、千載未有の國運に會して、猶無爲の閑日月を貪れり

而して年將に暮れんとす、慚愧何ぞ堪へん、嗚呼、國運の興隆、宗徒の墮眠、伏して

聖祖を想ひ、更に

大聖釋尊を想ふ、
一燈影淡き處、涙泣然として下る、

觀法華經の所感

本多日生

余は法華經の開顯は佛教全体の調和を講明し、而して特殊超勝の發揮をなしたるに於てを信せんとす、元來佛教は釋迦牟尼一佛の開示に基因するも、一代の施化は曠々漢々にして、其後數千年間の佛教歴史は諸多の英僧傑人を以て宣明せられ、各種の開發的主張を加へられたれば、今日に於て全佛教を達觀して、其幾多相異れる教義旨致を解決し會通するは殆ど困難事に屬す、然れども若し全佛教を達觀し會通すること能はず、然るにこゝに多幸なるは此の妙法華經の現存することにして、之を達觀し疏通するに一大指針を與るあり、此の經が佛陀究竟の妙談たるは余の信じて疑はざる所なるも、縱令佛滅後數百年後の教義開展の結果に由りて作成せられたりとするも、此經に表れたる教義は明に全佛教を調和して特殊の發揮をなせるを認めらるゝなり、故に此の經が佛教上の位置を知るべく、此の經自ら稱す是れ諸經の王なり王中の王なりと、此の言寔に我を欺かざるなり。

余は序説に列擧せる諸種の法華經觀を通觀し、又台當兩家の法華經觀を考察して、大に警悟する所あり、其は諸多の法華經觀は、何れも此の經を以て全佛教の調和と特殊の發揮とをなしたることを認め居ることにして、只其の眼識に淺深廣狹の別あるも、この經が佛教經典中に異彩を放てるを説かんと試みざるはなし、而して此の方面を歩みて能くその目的を達成したるものは、實に日蓮上人なりとす、然れども上人の遺文復汎濫として其の適飯を把持すること決して容易ならず是れ眞に佛教の爲め將た衆生の爲め痛嘆すべきの至なり、余幼より專心上人の教義を研鑽し、至心に上人の深意を求めて息まざりし結果、漸く恍惚として神會する所あるもの、如し、左に卑見の一斑を記して大方の慈教を仰がんとす。

佛教達觀の見地を得たりと稱するもの實に妙からざるべしと雖も、余の見解に依らば、經典としては此の經の述門方便品より本門壽量品に入りて、こゝに始めて完全なる佛教觀を聞し得たるものにして、傳燈者としては天台智者より日蓮上人に至りて始めて周備せる佛教觀を光顯せしものなることを信せんとす、天台智者は述門の義に依り佛教の調和發揮を理想せしも未だ彼は大成し得ざりし者なり、日蓮上人は本門の最深秘處を啓發し來りて、頗る圓熟せる佛教觀を闡明し、以て全佛教の調和と發揮とに於て能く遺憾なからしめ得たる者なり、法華經と他經とを相對して觀察するには教行人、

理の四一開會を論じ、絶待面の觀察に於ては教、理、行、果の四法光顯を説くは、是れ實に注意すべき重要教義にして、若し能く此の四一開會と四法光顯とを會得せば、こゝに完成せる佛教觀を識了し得べきなり、而して此の四一開會と云ひ四法光顯と稱するは、實に妙法の一名詞に包含せる所の義門にして是れ即ち法華經の實質なり、故に此の四一開會、四法光顯の會得は直に完全なる法華經觀を獲得するものにして、併せて日蓮上人の深意を體得するに至らん

此の四一開會と四法光顯とはこの中に三の重複あり、即ち教、理、行の三開會と教、理、行の三法とは全く同一の者たり、而して人開會と果法とは因に約すると果に約するとの別にして因果を一具すれば即ち一法に歸すべしと雖も、この二者は正しく宗教の實際の目的物にして、又是れ法界の本体なれば、之を因と果との二面より觀察して其の關係を判明ならしむるは尤も緊切なる教義に屬せり、故にこの二者を別離して觀察すれば、前の教、理、行の三と合して五箇の教義を有せり、この五箇の教義は是れ正しく法華經にして又是れ佛教の全体なりとす

此の五箇の大教義は佛教中法界觀、佛身觀、人身觀、教法觀、行法觀として、到處に宣示せられたるものにして、之を觀察するに、其の何れより開始するを適當となすべきかは、是れ亦一箇の問題なるべしと雖も之を佛法顯現の順序に従つて考

ふれば、佛陀の出現と成道とに始まりて而る後に教法の説法あり、教法は理を詮出するが故にこゝに佛の所證の理、教の所證の理あり、而して此の教に従つて復行法を定むるが故に、此の次第に依らば佛、教、理、行の順序にして、佛陀は吾人衆生を救済の目的物となすものにしてこの方面より考ふれば此の教法の起るに先ちて、佛と衆生との相對せるものは是れ實に法界の本質たることを知るべきなり、此の佛陀と衆生との二者、一方は救はんが爲めに、一方は救はれんが爲めに、其の媒介者としてこゝに教、理、行の三を産出したるなり、是れ小乘の見解の如くなるも其の實壽量顯本の大教義に由るに、此の義の根本的意義を示せり、若し佛陀能證の智と所證の理との關係に於て、前後如何を問ふものあらば、其は全く前後あるものにあらずして寧ろ佛陀の實在に依りて法界の妙理は運用せられつゝ、無始より今に來れるものにして、所謂佛陀は法王なり法の支配者なり、又吾人が教法を播聞して佛教に入るより見れば、教先づ初にありと云ふを得べきも、佛教の重要な生起論は、理と佛と教との三者の關係に存し、佛を起點とし中心として觀察するを以て、尤も緊切の義門となすを領すれば足れり、又吾人宗教心の發動より見れば、其の多くは人身觀より出發するものなるも、是れ亦佛教を大觀する上に於ては、この生起を重んずるを得ず、但に釋迦牟尼觀を小乗家の見地に止めて、悉達太子が人身觀よりして、この佛教は

興れりとなすものあらば未だ實在の本佛とその應現とを會得せざるものなり、斯かる人身觀を出發點となすべきにあらざるは論なきなり、寧ろ衆生の惑溺を憐愍し給ふ大慈悲心の發動を起點として佛敎を大觀すべきなり、之を要するに壽量顯本の旨致よりするも、又事實上今番の佛敎の顯現したる順序に見るも、必ず佛陀ありて後、敎法の興起したることを尤も嚴密に識了するを以て緊切の義門となす

斯かる次第なれば、完全なる法華經を得んとする者、即ち全佛敎の調和と發揮とを大觀せんとするには、必ず先づ佛身觀より進むを以て、適當なりと信ず、此の佛身觀に於ける法華經の指教は果して如何、是れ實に妙經が全佛敎の調和と發揮とをなしたる唯一の深旨なり、而して其の指教は嚴圓相對の佛身觀とも云ふべく、從劣說勝の佛身觀とも云ふべく、又始本不二の佛身觀とも云ふべし、或は之を三身即一論と云ひ、又應身事常住説と稱す、之を敷じて壽量顯本の妙旨と爲し、餘敎不傳の妙談なりとして誇る所なり (斯稿次續)

除夜

容 廣

人事急々歲月遷 更鐘傳得短榮前
隔將彈指昨兼今 空送光陰又一年

法華經諸異本に就て

法華出現の當時は如何なる形質を有せしか

國友文次郎

一 序

廣漠たる佛敎々義の調和と、及び發揮とに力めて、能く完成の美をなし、至妙の位地に達せるものは、實に法華の敎義と、理想なりとす。佛陀の大慈は滅後衆生の爲めに、四十餘年間縱説横説の多岐散漫なる諸經に、統歸を興へ、解決を下して、紛亂せる大藏の内に沒了せられんとせし、佛陀降世の眞意を明示すべく、こゝに法華八年の説法は開かれしものにして、法華は即全佛敎なりと云ふべし、よし假に非佛説の見地より論を下して、法華は滅後發展の結果なりとなすとも、そは佛敎發達の途中に、徒に傍徑に走せて、無益の思索や、卑近の俗信に走り、愚にも佛敎の眞意を忘れ、宗敎の本質と遠ざかりし當時の弊風を慨して、佛陀の眞意を光顯すべく、佛敎最後の發展として法華は述作せられたるものなり、或は亦法華を以て永き歲月に徐々に發達し、増加し、膨脹し來りたる諸多敎理傳説の集合なりとなすものありと雖も、是れ等しく開顯統一の大理想の一貫せるありて、最初發現の簡單なる法華に既に含まれたる大理想を、説明し、布演し、助證すべく、或は之に註解を附し、或は之に説明を加へ、或は之に

類似の傳説を包含せしめたるなりと見るべく、よし其の間多少の變遷ありたりとすとも、そは永き法華發達の時代に貫申し、注流せる大理想 今の法華に明に見らるゝが如き、同じ開顯統一の大理想の上より起り來りたる變移、添増にすぎざるべし。法華の如き至妙至美なる大理想大敎義は、決して非佛説論や、科學的攻究によりて傷つけらるべきものにあらず、たとひ佛説の内に其の根跡の認むべきなく、否藏經の内にもすらその存在を否定せらるゝ様の一奇怪事の現出するあらんとす、余輩は佛陀が勝手次第に幾多の敎法を説き放しにせしものにあらず、又佛陀が何の目的なしに單に時々の敎訓を垂れしものにあらずして、佛陀には衆生救済の大慈悲と大智慧との存在せしなりとだに信せば、必ずや法華を以て佛陀大悟の内に存し、佛陀大慈の下に光顯せられたるものとなさざるを得ざるべしと信するなり。

此に於て乎又何の恐るゝ所なし矣、余輩のこの研究は頗る試み易きものとなりたり。若し假に舌根不魚の神秘説を極端に固守して、羅什所譯の妙法蓮華經には一字一句の錯誤すらもあるべからず、全經凡て金科玉條なり、漢譯妙本の儘に梵本と—及び佛説の法華とは存在したりしなりとの前提より出發して、此の研究を進めんとせば、頗る窮屈に堪へずして遂に何等の發見するなからんを恐ると雖も、若し三國に經て幾多の歲月を重ねる 法華經なれば、重大の敎義 理想に錯誤

なき限りは、餘他の細末に亘りては、妙本と雖も尙論すべき點なきに非ずして、羅什の確信の如きも、之を精神的に解釋するの必要ありと認むるに至らば、余輩の研究は或は多少の光明を期し得られんか、余輩は假令如何なる結果に到達せんとす、決して法華の眞價値——佛敎の調和と發揮との重要な目的の爲めに、必然的に起りたる、法華尊妙の眞價値には、影響する事のあるべき筈なしと信じて、此の如き重大なる、興味多き、而も誤解せられ易く、異端視せられ易き、危険なる研究に指を染めたるなり。乞ふらくは全く保守的にして、歴史の發達と、變遷とを没却したる從來の研究に満足せず、亦單に皮想的にして、紙背にその眞精神を捕捉する底の達見なき、今の科學的態度に走るとなく、先輩の誘導と、鞭達とに助けられつゝ、この問題の研究を完成して、能ふべくんば法華出現の消息に新生面を開き得んとを、之れ余輩が所願の全体なり矣。



日什上人置文諷誦章卷上

齡八十老比丘 阪本日 桓 講述
增田 聖道 速記

其十五

校量一念信解之功德。文是より此一句九字の文を消釋して聽せませう此分別功德品の所説の經文に現在の四信と申す法門と滅後の五品と申す二ヶの法門が有ます末法の我等がためには大事の大事の法門て有ます其所で現在の四信と申すは一念信解の行人二には略解言趣の行人三には廣爲他説の行人四には深信觀成の行人此の四人が釋尊御在世の時の行人なれば現在の四信と申す此の四人は孰れも法花經本門壽量所顯の妙法受持の行者て有ます此四人の行者の中に於ては最初の一念信解の人が最極初心の行者て有ます今此の分別功德品には此の最極初心の行者に大功徳有る事を説き給ひたる御品て有ます借校の字はならべかんと讀みます字と量とははかる讀ます此の最極初心の行人が無意味に御題目を有難き事よと信念し口に御題目を唱へたる一念信解の行人の大功徳を備わたる事は八十萬億那由多劫の幾く久しき年月を經過して檀戒忍進禪と申す五種の大善根を積み行ひたる五婆羅密の深位の大士の功徳とならべかながへ其勝劣を量り見れば萬分千分百萬億分一念信解最極初心の行人の功徳にはおよばぬと申す文て有ます是れは本佛釋尊の所證の法所顯

復如來滅後と云ふ經の文より去ては滅後の五品と申す法門を御説になりました其名目は上の御品て辨じました其中の第二品より已下の四品の功徳をば其時其節に當つて一々に校量して御説になりしも最初第一の十信具足初隨喜品の功徳は此節遂に校量せずして殘しましたゆへ此の隨喜功德品に來至して第一の初隨喜の功徳を校量遊ばしました故に分別功德品の次に此の隨喜功德品を御説になつたので有ます是より今の諷誦章の文の意味を辨じて聽せませう此の誦文の意味は法華經本門壽量品所顯の三大秘法の妙法を説き給へる寺院にもせよ在家にもせよ其道場に參詣して最初第一に能化の教主が此の本門三大秘法の妙法をときたるを聽てさては我が身は無始より佛の身であるとして仰せられたるが誠に有がたき身の上であるとして我が身の上を大に慶び獨り我れのみならず他の人々も皆無始よりの佛て有と説くをさして他の人々の身の上までを大に慶び隨喜し餘りに有り難さに此の三大秘法の御題目を信念口唱し奉り且つ其慶びに堪へず他の人に對し右の所以を語り傳へ其傳へられたる人もまた餘りの喜ばしまた他の人に右の所以を語り此の通りに次第次第に展轉し傳へて最後の第五十人目にあたりたる人の隨喜したる大功徳が高大無邊の大功德であると本佛の釋尊が讚歎給ひたる事を御書になつたので有ます其所で今の諷誦章に又復滅後の五品の行人の中に於て

の法に約して辨じたので有る若し能證の本佛能尊の釋尊に約して辨じますれば法華經本門壽量品の如來無始事常住事智慧の三身即一の應身如來の堅に三世に高く横に十方に廣く利益周遍したる大功徳を聞て執述謗本の疑念を斷じ正信正念に本門の本尊を信する其大功徳は十萬億那由多劫の間五婆羅密を修行したる功徳とならべかながへて功徳の勝劣をはかれれば百分千分百萬億分勝れて算數を以て量り譬喩を擧て量ても此の一念信解の最極初心の行者の功徳には及ばぬと申すが校量の二字て有ます其所で今の諷誦章に經の現在の四信の行者の中に一念信解の一人のみを擧て餘の三信の行人を擧げざる事は末法今時の行者の我等の位置は正しく名字聞教の一念信解の位に在るが故に他の三の行人は御書にならぬので有ます又此の分別功德品の又復如來滅後と云ふ文より去て滅後の五品と申す法門が有ます一に十信具足初隨喜品二には讀誦經典第二品三には更加說法第三品四には兼行六度第四品五には正行六度第五品と申す滅後の我等が爲の大事の大事の法門て有ますが其中にて前に例して十信具足初隨喜品の行人を御書になるべきものをならぬのは次々下の隨喜功德品の説相に譲りて今此の品のときは略したので有ます

最初の初隨喜品の行人のみを擧て第二品より已下の四品の行人を略して擧げざる事は上の分別功德品の諷誦文と同意味にて未法今時の法花經本門の行人の位は名字聞教の最極初心の位なれば是の五品の中の最初第一の初隨喜の位の行人にてあるがゆへに是の一を擧て餘の四品を略したので有ますさて上の分別功德品の一念信解の行人と今の隨喜功德品の初隨喜の行人は俱に最極初發心の本門壽量品所顯の妙法の行人にて名字聞教の位に有りて毫も學文解了なき人物て有ます此の最極初心の二人の得たる功徳を格量するに就ては二種の意味が有ます一には最後の第五十人目の聞法微弱の行人が法華本門壽量品所顯の三大秘法の御題目の功徳を説を聽聞してさては我等が此の荒凡夫の色心が取も直さず無始無作三身即一の如來て有しか實に有難き身にて候ふと隨喜してまた他の人々も我れと同じく無始の如來であるとして他の身の事まで隨喜したるのみにて更に經典を讀誦するでもなしまた説法して他を教化するでもなきゆへに慈悲の恩徳が他の人では少しも推しをよぼす事は毫も有ませんけれども此の行人の得る所の功徳は高大なるを以て本佛の釋尊が巧妙に喩を取りて讚歎して此の聞法微弱の最極初發心の行人の得たる功徳は三明六通を得たる大阿羅漢の功徳に超過れたる者である況して最初第一番に本門の道場に參詣して能化の説法を親しく聽聞したる行人の功徳は勝れたり況して經典を讀誦して自行をなし更に説法教化

して化他の行に亘り一分慈悲の恩徳他人へ推し及ぼしたる讀
 誦經典第二品已上四品の行人の功徳の莫大なるを況して斷
 或證理して初住眞因の位より二住已上等覺深位の大菩薩達の
 得たる所の功徳の高大無邊なるをよと從淺至深して其人々の
 所得の功徳を格量したるので有ます是れが一種の意味の法門
 て有ます二には釋尊が法華經述門の法師品より去て本門の分
 別功徳品迄のは品の間に於て四信五品の行人所得の功徳を節
 々に讃歎し給ひたるを人ありて是れを聽き佛の讃歎し給ひた
 る所以を知らず已れが淺智を以て量り全く誤認してこれは
 これ名字聞教の初心の行人の一種未斷の荒凡夫の及ぶべき者
 にあらず初住已上斷惑證理の大菩薩方の功徳を説きたる者で
 有ると云ふて功を上位に推り行淺功深以顯經力の經功を知
 らずして猥に最極初心の行人を輕蔑する事を恐懼し給ひ彼が
 誤認を除き且初心の行者の大功徳を獲得事を御説になつたの
 て有ます譬へは好堅樹と云ふ木は一百年の間大地の中に埋れ
 て技葉を具足して地中より發生し僅か一日の中に高さ百丈の
 大木となると一般にして法華經本門の初發心の行人も又復是
 くの如く僅に一日一座の聞法によつて一切の大功徳を具足し
 まする復た譬へば雪山と申す山に迦陵頻伽と申す鳥が有ます
 此の鳥は穀の中に在て聲を發して鳴きます其聲の美妙なる事
 は諸鳥に勝れたると同じ事て四信五品の初心の行人が無明の
 煩惱の轍の身の中に於て法華經本門壽量三大秘法の御題目の

妙音を口に發したる其功徳の高大なる事は爾前述門の佛菩薩
 に超過し勝れたる事は彼の迦陵頻伽鳥の轍の中の美妙の聲を
 發すると同様の者て有ます是れは行淺功深以顯經力とて法華
 經本門壽量品所顯の眞の事の一念三千の法華神力品結要の
 妙法五字の題目の力用の高大なる事を説き示したるが今此の
 隨喜功徳品の説相て有ます此の通りの一種の意味の法門が有
 ます今の誦誦章の一句九字の文の中には此の二種の意味の法
 門を合藏して御書になつたので有ます此の五十轉展隨喜の功
 徳と本門壽量の經の力用の莫大なる事を知らんと思はゞ宗祖
 の御書録内十六の卷の四信五品抄を拜讀なされよ

宗教の兩性を論ず

小倉 樗 哲

古來宗教學者が龍噴虎鬪の論議區々として決しなかつた、自
 力教と他力教との兩説は、正に是れ宗教に兩性のあることを
 示すものである、宇宙間の凡てのものを見るに皆共に人の
 思想の二個に分岐するが如く必ず二個の性質を有して居ら
 るものはないのである、これを人の上からは男性と女性とに區
 別されて居るが、思想上より言ふも男性は凡てのものに概
 括的である、即ち歸納的性質を以て居る、而して積極的
 又活動的である、それであるから自然力の様なものも、如何
 に偉大であらうが皆能動的に自己を中心として解釋するので

ある、然るに女性に至つては其思想は演繹的である、夫れ故
 凡ての事が部分的に解釋せられて統括的でない、それであ
 るから消極的てまた非活動的である、凡ての事を決するに
 自己の自力に由らないて、他のものに依頼する傾があるので
 ある、
 これを宗教に對比するときは、男性の思想が自力的宗教で
 あつて、女性の方が他力的宗教と相合するのである、

自力教とは言ふまでもなく自己の力の由つて、宇宙的我を
 發揮するのである、即ち汎神的統一神を認めて、自己自身
 力に由つて其の自己を發揮する様になるのであるが、他力教
 とはこれに反して人格的唯、實在神を認めて神の宿命を信じ
 神の力に依頼して未來の福趾を得んとするのである、これを
 人生に對比したならば、自力教は其性質上歸納的男性的だとい
 ふことが出来、他力教は其性質上演繹的て女性的だといふ
 ことが出来ると思ふ、
 されば兩教の立命の點と信仰的人格とが全く兩性的に分岐
 せられて居ることが解かる、

例へば自力教を信仰するものゝ立命の點は積極的であつて
 己を克己自制忍耐等に由つて自己の意思を鍛練し、宗
 教の客體に向つて向上するのであるが、他力宗教の信仰を以
 つて立命を得たものはどこまでも神の意思に従つて未來の福
 徳を得んことを希求し、何事も神の力に依頼するのである、

であるから自力教は又意思的て智的であるとも言はれ、他力
 教は感情的であるともいはるのである、
 こゝに至つて愈々自力教が男性的であつて他力教が女性的
 であるといふことが言はるゝのである、
 又愛の點から觀察してもキリストの愛や阿彌陀如來の慈悲の
 様なつまり他力教の愛は女性的性愛であつて消極的の涙もろい
 愛である、

例へて團体的救済よりはむしろ個人的救済に重きを置く様
 な傾きがあるが、自力教の愛は積極的て男性的である、其愛
 は涙の愛でなくて勵ますところの壯烈な愛である、であるか
 ら個人的に冷淡であつて寧ろ團体的に熱誠である、
 是れを又兩教の信仰者の人格より觀察するときは尤も適切
 なる解釋が得らるゝと思ふ、即ち宿命他力を信するものは其
 人格が多くば女性的人格の人である、而して自力向上を信ず
 るものは多く男性的人格の人である、
 基督の人格は愛の化身なりといはれて居るやうに其性格は
 どうも男性的熱烈の人とは見えぬ、どうしても女性的の熱涙
 家である、而して我國に於て見るも又かくの如くである、他
 力淨土を設立した法然上人も、一向念佛を唱へた、眞宗の開
 祖である親鸞上人も共に女性的の人格であつたやうに思はれ
 る、然るに自力を主張したところの禪家の諸長老を見るも勿
 論純自力教ではないが法華事顯本を唱導した日蓮上人も、其

論純自力教ではないが法華事顯本を唱導した日蓮上人も、其

他宗教家ではないが希臘のソクラテスも支那の王陽明も皆男性的の人格であつた、であるから其熱烈の度合意思の強固な點、不羈剛健な點が如何にも男性的に發揮されて居る、女性でも又自力教を信じたものは男性的の性格を形作つて居るものが多いやうに思はれる鎌倉時代に女性政治家として有名な政子夫人は有名な信仰家であつて尼將軍とも言はれた人であるが彼れが遺憾なく政治的手腕を振はれたのは信仰の力によつたと今日學者が認識するところであるが彼の剛健て又決行力に富んで居たのは如何にも男性的であつた、是れは彼が禪宗の信者であつたからであらう、

斯くの如く兩教の思想を尋釋し來つたならば宗教上の自力及び他力とは實は一物の二面的の名稱ではなからうか、畢竟人といふものは兩性の相稱であるやうに神が自力的と他力的と二方面に發達したものではなからうか、而して更にこれ人を人の思想上より觀察したならば尤も明瞭に解ると思はる、何となれば人の思想は人に兩性あるが如くに又兩性的に分岐しつゝあるのである、然れども之を偏性的に男性はどこまでも男性的に、女性はどこまでも女性的に使用し發達させたならば誠に人生は偏傾なる常に相撞するやうになりはせぬか然るに男性と女性とが相和して一家庭を組織するに由り却て兩性の思想が融和されて圓滿なる活きをなすのである、而して更に之れを細かく論じたならば男性と雖も又幾分か女性

的思想があるやうに女性にも又幾分か男性的思想を持つて居るのである、うれて活きの上からも兩者の融和が非常に助けをなすのである、

かく考ふると此意味に於て人智の發達は必要上から宗教の統一をなさるべきものではなからうか、否ん寧ろ將來に於ける宗教即ち文明的宗教は必ず此の二個の性質を統合したものでなければならぬと考ふる、

自力の宗教に於ては主義が積極的であるから現世生活上には尤も適切なるものであるが、其未來觀に至ては餘程高遠な理想を有して居なければ夫れに到達する事が困難であらう、否ん一般上からは寧ろ不可能のことに屬するかも知れぬ、そこに至ると他力教は未來觀の上からは、消極的で悲觀的に傾き厭世觀に陥るやうな恐れがあるのである、されば圓滿にして健全な宗教は兩教の俱力を假らなければいけぬので、つまり家庭に於ける圓滿が兩性相和して始めて得らるゝが如くである

こゝに至ると我聖祖日蓮上人は、十三世紀の頃業に已に茲に著眼し玉ふて、兩教の融和を圖られて居るのである、即ち三大秘法の教義が明かに此の意を垂示されて居るのである、のみならず、其の教義は宗教的に完備されて居ることは、今いふた通りであるが、是れを純正學として、立派なる組織と繼續とを備へた純然たる哲學である、近頃大分議論がましかつた黒岩氏の天人論などは天台の三千論を讀み、日蓮上人の

三大秘法を知つて居るものから、見ればまた今一步だといはなければならぬ、かく教義の確立されて居る宗教といふものは、今まで殆どないのである、基督教の如きは勿論であるが比較的教義的に意を用ひられて居る、眞言、天台の如きでも未だ此の如く完璧を稱するに足らぬのである、世の中には唯だ太鼓の音のみを知つて、日蓮上人の教義が支離滅裂で、唯だ迷信の鼓吹のやうにいふものがあるが、勿論是れ等は相手にもいふにも足らぬものであるが、かかる謬想は一日も早く除きたいのである、否ん日本は妙法主義によりて統一し、妙法主義によりて健全なる發育を遂げねばならぬと思ふ、少し誇張に失するやうではあるが、將來の世界は此の妙法主義によりて、更により大なる發展を期せねばならぬと思ふ、是を要するに、宗教の自力または他力とは、未だ相對的たるを免かれぬ、宇宙森羅萬象に必ず兩性のあるが如く、宗教にも兩性を有して居る、自力他力兩教とは即ち是である、されば偏性的に萬物が圓滿なる能はざるが如く、宗教も亦自力若しくは他力のみによりては、健全なる思想と稱する事が出来ぬ、將來の文明的宗教は必ず兩者俱力によりて始めて圓滿なるを得るのである、而して今日の成立宗教中に於て此の兩者の融和されて居るものは、日蓮上人の妙法主義以外これを認め得ぬのである、天下篤信篤學の士は須らくこゝに一考を煩はしたいと信ずる、

不受不施史料 (八)

梶木日種

五、清派の傳燈と天保法難

不受不施禁制後派内に分裂を生じたとは已に前節に述べたがその中の正統ともいふべき清派は、日向佐土原の日講を中心として法統を傳承した、この日講は配所に在ると三十三年、その間に他の同心の高僧達は漸次寂去し、獨り日講のみが最後の法燈として海内の清派を統督したのである、殊に日講は佐土原の領主飛騨守、式部少輔の二代に涉りて大に優待を受け、閑室を結び園地を構へ、侍者兩三輩常に左右に給仕し、家士を始め領内の縹素は來つて内外の典籍を講習したので一藩の師父と仰がれて大に尊敬せられた、祖書録内啓蒙の著述及び萬代編鏡録の編著等は實にこの間に成功したのである、これ等の事柄は配所三十三年間の日記に細大録されてある、その日記を見ると看經、接客、上は玄妙を論じ下世話に及び當時國家の元氣、風俗の美惡、人物の賢否等概見する事が出来る、これは鶴城叢書(四卷)と題し東鑑風の文體で、實に好箇の歴史材料である(已に東京帝國大學史料編纂掛へ寫本が寄納されてある)日講はかく悠々としてその餘生を送り七十歳を以て寂去した、その時の辭世二三を示さう

白妙の法の蓮の華開け、經路共に歸へる寂光

嬉敷予大白牛車に乗るの道、火の車をば餘所に見做して
言ひ置かんところなけれ覺めて後、昔の夢の跡を思へば
又日講の自叙傳をその著書語問答の中より抄出して參考に供
しやう

余十歳にして尊師に陪從し、初て剃髮染衣の身となりしよ
り以來、宿縁のいたす處か志求法に在り、法華を覆讀す
る時已に其部數を記録して三寶の靈前に捧げ以て學道能成
の祈願に擬せり、外は柔順の質たりといへども、内には至
剛の心をいだき、曾て普天の法燈たらんとを期す、漸く奥
師の筆跡を見るに及んで、中心深く天下諫曉の微望をふく
み、死身弘法の憤志を催す、吾師に隨逐十年の星霜を経た
り、其間常に法澤に浴して勤勵のはたへをみがき、鎮に恩
光を蒙て修練の意を照せり、台學の綱格當家の骨目識に
納め心に熏ず、廿歳に及んで師の膝下を許し學海を廣せん
が爲に遙に關左に趣く、兩談經歷して鑽仰數年、其の間或
は岩代相馬に行脚し領充二師にまみへて、教觀の旨歸を決
し、古今の異論を明め、兼て安心を得、又悉地を傳ふ、或
は中山古湊に行て靈寶を比決し、諫論を並難して法門を論
談し精義を決擇す(中田日養親類たるに依て世間論を以て、且時義親を
一のみの時日養と受不受の問答を起して往復數回終に彼をして開口せしむる
のみならず、還て深く感じ、京都立木寺日養へ春札を遣して余が學問秀發の趣
を告げ類族にも語り傳ふべしと、立り、日養より余が學道は余が學問秀發の趣
林にも語り、これは二十三歳の冬也、二十五歳の秋古湊日養に下り、何れも
諫論を決す) 諸師の印可のせて簡牘にあり、廿七歳日達と

共に歸洛をとげ師の陋室に隨逐すると半歳、談藝を白川に
かいつくろひ、講席を堺井にうながす、師聞て感涙滴々た
り、其後更に未だ聞かざる所を諮詢し覺て、同年の冬再び
關東に趣く、明年癸巳師はきなく遷化するを聞て、驛舎に
急を告て速にはせ上る、講筵を開て師徳を稱揚し、石碑を
立て、高惠を報酬せり、既にして其書籍を吟味し三句をへ
て亦關東に歸る、傳法利他の志確乎としてぬけず、これよ
り後支文を事とせず、夏臘を積て止觀を探り、光陰を惜て
内外を考ふ、小部の講釋もの、數ならず、三十五歳心漸
く洞然として自ら學業に入眼せるとを覺ふ、此冬再び華洛
に上て彌儒典の緒餘を檢べ、ますく諸宗の章疏を求む
餘暇幸に衆中の許容を受て快く鳥羽實相寺の寶藏に入り、
當宗歴代の秘書を概見し與師一期の心地を領納せり、凡ろ
奥師の所述典師の所傳乃至片言隻字に至るまで悉く纂記し
て一卷を成し、奥心鑑と題して常に机右に置き生涯の寶鑑
後世の明鏡とせり、余曾て著述に志し有り、其一是祖書
の細釋、其二是禁義の答目なり、目錄の草案速に成れり
大抵平日の所業台家を枝葉とし、當家を根抵とし、餘學を
緯とし祖判を經として、覆讀熟覽亦幾許、回と云とをしら
ず、諸寺諸山に求て當家の書籍とさへいへば、自らも寫し
若し人をしても書しむる事凡百卷に及べり、凡近代の學者
當家をわすれて名利の廣學を表とする故に、急に臨て心地

惑亂し受不施等の妖怪甚しきとをなげき、其弊をのぞか
んが爲なり、源と奥師と嚴制を重する故也、翌年關左より
頻に招て伴頭職を勤めしむ、則玄義全部講成て三十九歳結
願の鐘を鳴して談林を快く退く、既にして閑暇を得著述に
便ならんとを欲して、江城谷中の深窟に籠て藏經一覽を企
つ、未だ數日を逾ざるに又妙典の能化の重職に請待す、辞
謝再三やひとを得ずして入院す、文句をひばどひてこゝに
歳をこへ、未だ幾くならずして公庭の法難類に催し邪徒も
亦訴ふ、余始終少しも其節を變せず、死を讓てさきにをき
或は公場に出て、宗義の法威をふるひ、或は諫狀を捧て執
權の嚴勢をねかす、終に四十一歳夏五月廿九日加賀爪甲斐
の守の亭より日州佐土原の領主島津飛騨守の預りとなる、
江府飛州の館舎に滯留し六月廿六日發足して日州の配所に
赴く、其路次の行粧及び佐土原住居のありさま別に筆記あ
り云々

於戲余若年の背起す所の大願二箇條共に快く成就せり、進
ては奥師の遺光を耀し習師の徳風を顯し、退ては萬世の規
矩をのこし千載の指揮に備ふ、苟も其法燈の任を論せば天
の曆數人の推舉今の世に吾をすてしは誰れぞ、これ自高自
負の心を懷て芳言を吐くに非ず、法滅に臨て系嗣を絶し止
とを得ずして心情の一端を語するのみ、三寶照知し玉はん
あゝ寂々たる晴曉つくく是を思へば宿殖の行因涙を催

し、深深たる静夜よくこれを案るに將來の得脱掌を
指す、何ぞ夕死の恨をのこさん、豈冥利なしといはんや…
維時寛文第九已酉曆臘月哉生明
日州佐土原講客
幻居庵夢遊子
日講 四十四歳
さて日講が七十歳の時即ち元禄八年十一月に、關東より良選
日珠といふが態々日州へ下向して日講に謁し、自から公場へ
諫狀を上り謗國の與同罪を滅せんとの意を述べたが、日講
は今更諫狀を上るとも無益なりとて、莊子を引いて日出後
の燭火、雨澤後の濃霧なりと諭し、法燈相續を計るべき旨を
誨へた、仍て日珠は遂に日講の付弟となり大阪に上りて東高
津に庵室を構へ秀妙庵と稱し(一説には京都の日相の開基だ
ともいふ) 清派の本山として不受の法燈を繼承するととなつ
た、この外各地に散在して居つた主なる庵室は

- 河内國野崎 光長寺
- 和泉國新在家 庵(無名)
- 備前國鹿瀬 妙宜庵
- 備前國斗有 松光庵
- 備中國引舟 一鶴庵、知足庵
- 美作國川口 妙泉庵(これは初め先例派であつたが終
に清派に歸入したものである)

右の外關東にも存在して居つたものであらうが、記録が逸出した爲めに不明である
これ等の庵室は大低民家の離座敷などを充用したもので、別に構造したものは殊更四圍に林藪などを繞らして態と建物を隠蔽したものである、秀妙庵妙宣庵等は即ち後者の部類であつた

の頃内信者が庵室へ參會するには毎に夜間に於てしたもので、庵室の近傍の信者は夜間私かに往來して翌朝隣人にも知らしめぬやうに注意し、遠隔のものも所用に托して出掛けて行くが、途中で同心の信者に出會ふとも互に知らざる爲めを和したもので、それでさへ深更に警咳が外へ漏れることを恐れて壯俊を戸外に立たせ嚴重に警戒を加へ、若し捕吏の影を認めたらば直ちに本尊聖教を奉じて立所に遁逃したので、それ故に會衆は常に旅装を解かず居つたものである、又清僧が招請に應じて外出する場合には夜間俗装して密行するか、或は武士に假装して往來したもので、さて内信者の家に到れば必らず納戸に這入つて密かに修法して講話をしたから俗に「お納戸坊主」といふ冷評を受けた、尤もこれ等の僧衆には前節に述べた施主の清者が必らず隨伴して居つたもので、又何時捕縛されるかも知れぬから豫て奉行所へ上るべき諫狀を懷中して居つたものである

かくの如く當時の状態は恰も博徒が法網を潜つて賭博に耽けつて居るやうな風であつたので、一面には受不施派の僧徒が鶉の目鷹の目で許さ出さうとするし、一方には狡獪なる捕方が内信者を恐嚇して金品を貪るから、誠に困苦を嘗めながら辛うじて信仰を持続し來つたものである、乍併遂に滅亡の日が來つたのである、即ち天保九年七月十九日に至つて大阪東高津の庵室は破却された、當時の傳燈者日寛を始め衆徒は孰れも殉難した、元祿十一年に日珠が日講の跡を繼承してより(珠より照、鑑、順、鏡、達、讓に傳へ寛に至る九代)是に至るまで百四十一年間、明治元年戊辰に先だつと實に三十年である、これに前後して各地の信教者は夫々斬斷等に處せられた(庵室は破却されたのもあり、残りたるもある)和泉國新在家附近即ち和氣、井の口の如きは同年八月十一日神八幡祭禮の日俄に大阪より捕吏が馳せ來りて大に騷擾を極めたといふ、その時寺門村阿伽陀山に天和三年京都の日相が石經全部を收めた石碑が在つたが、その碑を毀はし、地中より掘出した一字一石の經石凡そ七俵計を大津の海濱に投棄したのである、その斷碑は畦道の橋材等に用ひられてあつたが、去る明治二十七年九月にこれを収集修理して舊地(泉北郡郷莊村大字寺門字阿伽陀山)に復建された、その碑を見ると長凡六尺許の花崗石で縦に五つに割られてある(即ち表裏を二分し、その表部を三ツ割にし、裏部を二割にす)又碑面の

文字は一々鑿り潰してある、これを見ても如何に當時の處分が苛酷であつたか窺はれる
この法難は只だ清派のみでなく、苟も不受不施とさへいへば悉く滅却されたのであるから、海内の不受不施は残りなく全滅に歸したのである(現在の二派に關しては後に説明をする)

因に云ふ彼の堯了の一派は「駈出訴訟」と稱へてその派の小僧が漸く十七八歳に達すると、直ちに奉行所へ不受不施主義の諫狀を呈出して、求めて流罪に處せられたものである、彼等はかくして謗法の與同罪を免れ不惜身命の立行を完うしたと自覺して居つた、併しこれ等は全く宗教學上にいふ病的信仰状態に陥つたもので、この事に就ては清派より奥師が、「縱雖苦身行一不契正法理一徒成虛假行」と云へる訓誡を提示して彼等の無謀を詰責したものである、惟に彼等が始終政府の手を煩はしつゝあつた結果遂に自から不受不施の勲滅を促がしたのであるまいか
今や本節を終るに當り參考の爲め不受の派内に彼此異議を論じてある書名を紹介しやう

清派の方には堯了派對の論書として、日講著の堯了狀態破條目、日念の能破狀追加と慈諭旨跋記、日新の石上物語を始め清濁辨明論、折辨評答、復評、覺隆無歸記、破邪顯信錄等があり、又日題派に對しては日照の破邪立正記、俗立に對

しては日欣の破導勸入記等がある
堯了派には日通の除構記を始め返答記、流布決、評答記、立施主順正義、破語石上掃除記及び適時信規論等がある
この外清派には梅花鶯囀記、法水養老記(正續二編)といふがあつて、受不受の由來とその正邪を平易に述べてあるから、この二種は殊に内信者の讀本として大に俗間に流布したものである

古定賢正氏著『日蓮上人の研究』を讀む

橋 哲

曩きに爾然として、帝國論壇の一大壯觀たりし日蓮上人の研究も、一度高山樗牛氏遊いて振はず、吾人甚だ慊焉の情に堪へざるものありしが、上人の研究は近來復び勃然として復興し來り、試みに今春以來上梓せられたるものに就きて見ると、高橋五郎の愚論『日蓮論』を始めとして、蟻川、菊地兩氏の『日蓮上人傳』あり、片々たる一論文に過ぎずとするも、渡邊無邊氏の『日蓮上人の人格』ありき、然れども、未だ日蓮上人の眞容に緬奉し、神靈に接觸し以て上人の面目を新たにしたるものあるを聞かざる也、

頃日古定賢正氏の新著『日蓮上人の研究』あり、本書素より其の完全を稱するに足らずとするも、曩きの三書一論文に比すれば、確かに異彩を以て稱するに足る也、古來日蓮上人の研究は、其の人と其の書とに於て、數字的には乏しからざ

りき、されど多くは唯だ歴史的事實にのみ偏して、偉人の研究は、單に歴史傳記によりて能事終れりとせられき、かくして上行菩薩の再誕たりし日蓮上人は、唯だ房州東條の濱に生れたる、一僧が鎌倉名越松葉谷に叫び、有ゆる迫害を経て、身延山鷲の山風に生涯を終れるなり、人は怪まん、日蓮上人は何故に上行菩薩の再來と云うめり、何故に上人は尊き人なりとは言ふめり、熱罵せるが故乎、刀杖瓦石の迫害を蒙りたるに依つて乎、吁々然り、吾人も上人が單に此くの如きの人ならば、諸君と共に此の怪みを止めざるべし、然れども眞の上人はかゝる歴史的一貧僧にてはあらざる也、新著『日蓮上人の研究』も亦想ふに、意の茲に存するにあらざる乎、本書は其の餘裁上より見れば、片々たる論集の觀なき能はず然れども、靈妙思議すべからざる上人の偉人格をして、遺憾なく、其内面を展開し來りて、是を組織的に記述せんは想ふに是れ容易の業にあらじ、吾人は暫く著者が苦心の趾を察して、かゝる多大なる望を他日に俟たんとす、況んや、斷片必ずしも捨つべくして、系統組織の必ずしも採るべきにあらざるをや、

上人の研究か古來、牛に汗し棟に充つるが中に於て、特に吾人の本書を以て異彩ありとするところは、上人の研究上に於て、本書は確かに一新生面を展き來りたることは是なり、即ち先きにも言ひたる如く、從來上人の研究は、多く歴史傳記の末に走りたりしを、新に上人の内面に入りて、宗教上より信仰上より、社會上より、或は客觀的に或は主觀的に上人の人格に眞接せんとせしことにして、殊に著者は唯一片の論義に據らずして、上人の純主觀に入りて、又は宗教の純信仰に

入りて、上人と法華經とを劇美化せしめんとしたることなりとす、是れ吾人の著者に向つて其勞を多とするところなり、更に著者は上人を見るに、唯に宗教家とせずして、鎌倉時代に於ける詩人として文學者として、著者獨特の審美眼に訴へたる邊は、是れ實に一新機軸を出だしたるところにして、吾人は大に著者の爲めに、其成功を稱へんとするところなりとす、

例へば『日蓮上人の詩人的生涯』を論じたる『鎌倉文學としての御書研究の趣味』、『種々御振舞御書の文學的價值』を論じたる、殊に論中身延山御書の文學的產物として言ひたる處は、著者の審美眼の鋭さを賞せずんばならず、なほこゝに捨つべからざるものは、巢林の劇詩中に現れたる『七里姫の性格』を判じて、戀て上人の研究に應せんとしたる處なりとすかゝる研究は時代の產物として、所謂時代の上人と時代の信仰を見んとするに、最も適切なる研究にして、余輩は更に著者が、進んで『日蓮記見視』の全豹に就きても他日其意見あらんを信するものなり、要するに『日蓮上人の研究』は、所謂二十世紀的研究の新生面を開きたるものにして、著者が多角的才能は、又能く新研究の運路を開けりと謂ふを得べし、萬卷の歴史的上人に據らぬ人は、必ず本書によりて首肯すべき點多かるべき信ず、吾人も亦此點に於て大に著者の勞を多とするものなり、

附言、本書に就ては更に精細なる批評を試みんとしたりしを、去月以來病床の客となりしを以て、最も多く余の眼に映じたる點二三に就きて、今は其の思の儘を記したるのみ幸に折を得て、他日大に論ずるところあらん乎、

(明治二十八年十一月八日稿)

教界時言

一 記 者

○ ▲戦争もすんで世の中はとにかく平和の曙光に浴することが出来たなんの彼のつといふはいふが平和の曙光は宗教徒としては一寸喜ばねばならぬ

○ ▲それで政治も實業も經濟も大分刷新されべくなつたが然し宗教の方面はちつとも刷新される様子がないこれではとてもだめだ

○ ▲興國的の日本には又興國的の宗教がなくてはならない然るに興國的宗教家が居ない軍隊社會にはとにかく東郷といふ偉い人物が出た宗教界にも東郷が出なくてはならぬ

○ ▲鎌倉時代はとにかく源平の戦亂がやんで興國的機運の熟した時である榮西、法然、道元、親鸞、日蓮皆この時代に出た是は興國的時代を利用した興國的宗教家である

○ ▲戦死者の葬儀や追悼會にばかり浮身をやつさずにはちつと國家の大勢に注意して宗教の立場を發揮したらばどうであらう

○ ▲佛敎界にも博士とか學士とかいふ學究先生が大分出來たが然しこんな先生が幾ら澤山居ても唯寒むさうな顔ばかりして居て國家と宗教の推移には何も眼を注がない此なものか幾ら居たつて何にもならない此間目白の坊様が毎日市中を鐘を叩いて歩いて居たがこの人が不幸にも途中で死んだが此人などの胸にはきつと大宗教があつたに相違ない

○ ▲聖門の状態も祈禱やら縁日なうがかう盛んでは實際何も手が出せないどうしてかういつまでも癖が直らないのだらう

○ ▲三十八年ももうすんださて將來の宗教はどうなるであらう來年あたりは何か花々しいことでもやつたらどうであらう

事實としての敎家の妻帯問題

鐵 骨 生

一 明治維新の大業成るや、佛敎革新の第一問題として、敎家妻帯論は、當時を風霏したりき、而して妻帯論は時代の容るゝ所となり、今日にありては寧ろ妻帯せざるを以て、固陋守

舊を以て目せらるゝに至れり、是れ寔に妻帯義の人生に於ける自然にして、又最も必要の事なれば也。

吾人一と度森羅三千の機微を察し、宇宙万象の眞理を達観し來らば、凡そ物に於ける二面、事に於ける表裏、大は宇宙より、小は顯微鏡下の細菌に至るまで、一として有せざるなきを知る、而して人に於ける男女の兩性あるは、即ち此の自然の理法が、人性に於ける二箇の天性を二様に現はせるものにして、即ち物の二面たるや論なけむ、されば人の男女兩性相合して、所謂夫婦なる者を形造るは、是れ實に自然にして天性を全ふしたる者、特に僧侶のみが妻帯すべからずとは、吾人其所以を知らざる也、而のみならず、人の婚姻をなすは常に自然の本能を全する上のみの必要ならず、人は男女相和してのみ圓滿なる生活をなすを得べし、物の二面は唯だ二面として特に稱すべきなしと雖も、二面を離れて一面の存するなく、一面を去りて一面の存するなく、二面とは之れ畢竟一物の總稱なるのみ、此の如き一物の兩面をして、殊更に一面つゝの活動をなさしむるは、そが腰くまで圓滿ならざるや知るべきなり、されば人類の如何なる階級種類を問はず、人の婚姻すべきは自然にして天性を全うしたる者なり、此の意味に於て、吾人僧侶の妻帯は毫末も疑義を容れざるべし、然れども人生の妻帯するは、唯だ自然の本能を全うせば足れりや、是れ余が僧侶妻帯義に對する第一の疑問たる也。

二

人類を以て果して高等動物中の最上位なりとせば、何故に吾人は動物中の最上位なるべしや、吾人若し動物の本能のみを以て判斷を下せば、人類以上更に數等なる動物の本能を認むるものあらん、吾人が自から稱して、動物中の最上位となし、萬物の靈長となす所以のものは、人に理性の存するあるが故也、人は實に理性の判斷によりてのみ事を圖り事をなし、自識を統一し、自己の人格を完成するを得るなり、此の如く自己永遠の目的を有する人生に於ける最大要義たる婚姻が、唯だ自然の衝動に任せ、本能の満足を買ふに過ぎずとなさば、吾人餘りに其の義の簡單にして没分理なるに驚かざるを得ず、然れども吾人の見る所を以てすれば、人生の婚姻とは決してかゝる簡單なる者にてはあらざる也、吾人の見聞にして多く誤らずんば、人生の婚姻は少くとも、是れ以上理性的意味の目的を有せるを知るなり、何ぞや、人は婚姻すると同時に、兒を生み、兒を養ひ、自己の人格を永遠に遺傳せむことを期するもの也、茲に於て乎、所謂家庭組織の必要を見るに至る、されば婚姻の目的の第一は家庭組織に之れありと言ふも、敢て不當にはあらざるべし、されば吾人は、そが果して理想的なりや否やは知らず、兎まれ、夫妻相和して家庭を組織するを得ば、婚姻の或る目的は確かに達せられたるものなりと言ふを憚らざるべし、故に若し人生の婚姻にして、家

庭組織を度外視するが如き、又は家庭組織をなし能はざるが如き、婚姻により却て夫妻共に慘劇を見るが如き者あらば、そは確かに墮落の婚姻と言はざるべからず獸的妻帯と言はざるべからず、

三

人生の婚姻の第一の目的は既に家庭組織にありとせば、家の妻帯を決する亦家庭組織の目的を達し得らるべきか、否かにあらん、而して此の問題を解決するに當りて、第一吾人の決すべき問題は、敎家の境遇が果して家庭組織に適當なりや否かにあらん、

吾人は今敎家諸君に對して、忌憚なく評言を下さん、吾人の見るところを以てすれば、今日の諸君は家庭組織をなし得べき境遇を有せざる也、換言せば今日の寺院制度なる者は妻帯の境遇にあらざる也、請ふ吾人少しく何が故に其の境遇にあらざるかを語らん乎

今日の寺院制度をして、若し普通社會に類似のものを求めなば、正に是れ官吏の官宅を以て目するを適當なりとなさん、見よ僧侶の住職せる寺院は、自己永遠の所有にあらざり、即ち一宗の主宰者たる管長の任命により、暫く自己が布敎の役宅たるに過ぎず、されば寺院とは即ち僧侶に對する官宅にして其の家族に對する邸宅にはあらざり、そは假令僧侶に對する邸宅なりとするも、一家主権者の居宅は家族の居宅なりとし

四

て、毫も差闕なかるべきも、從前の制度を墨守する寺院は、妻子を持ちて家庭を組織するの經濟力を有せず、常に經濟力を有せざるのみならず、自己の所有にあらざるを以て、凡てに於て家庭的經營をなす能はず、既に家庭的經營をなし能はざれば、妻は畢竟下婢の要たるに終らん、否らすんば納戸生活の贅物たらんのみ、此くして妻は終生起つべからざる一の玩弄物たるに終らん、嗚呼是れ何たる慘劇ぞや、身は假令凡庸群衆の一鵠たる能はずとするも、如來に伏し、佛陀に誓へば、精神は是れ高遠限りなき任命を有せる人天の大道師、釋尊の御使なり、宗義は常に空理空談のカラ騒ぎにあらざりして身讀跡達の深甚微妙を行しながら、纖弱世に譬ふべきなき女子を一の玩弄物視するに至りては、吾人更に敎家の下劣なる人格を議せざるべからず

吾人は如上敎家の妻帯は、寺院制度の改革せられたる時はいざ知らず、今日にありては其の境遇に逆ふものなるを言へり、而して是より來るべき慘劇をも言へり、詎ぞ知らんや、慘劇は之れ以上、より偉大なる慘劇を生じつゝ、是あらんとは吁々大慘劇！ 是れ果して何ぞや、佛主曾て妙音朗かに救の聲を上げ給へる死の襲來之れなり、如何に人天の大導師とは言へ、敎家亦肉體を有せる以上死てふ人生の最大難關を免るゝを得ず、假令自己は信仰に生きて、安然として涅槃に入

りとするも、六慾煩惱の炎は、遺族の頭上に懸り来るを、奈何にせん、寔に今日の寺院制度にありては、敎家一朝逝かば、其の遺族は實に死するに道なく、生くるに道なき大慘境に墮るを知らざるべからず、假し肉體は永遠の生命を有せず、肉の苦樂は脱離の一間にありとはせよ、人生に於ける生活とはかゝる抽象の意義のみによりて解決すべきにあらず、况んや社會道德、又は風敎の維持を以て任せる敎家其の人が、社會風敎を蠶毒すべき慘劇を播きて顧みずとは、施いて佛敎の神聖をも穢すものあるに於てをや、吾人は信ず、敎家妻帯問題は、決して社會の認むるが如きつまらなき問題にてもあらざれば、又過去に於ける理論的考究の問題にてもあらず、實は是れ事實として敎家今日の最大問題たる也、

五

吾人は論じて茲に至らば、敎家の爲め一擲の熱涙を灑かざるを得ざる也、肉を輕んず、肉を卑める敎家の歴史は、肉の爲めに常に墮落を叫ばるゝに至れり、試みに回想せよ、人生を解脱せりと自稱せる生き如來の、奈良朝以來如何に艶かなる文字に飾られたるや、そは正史の傳ふるところにあらずとするも、我國の戯曲、稗史、説話等を一度播讀し來らば、落花は管に祇園の夜嵐のみにあらざるを知らん、親鸞は人生の肉欲の救ふべからざるを知れり、彼は一面より見れば、實に粹人にして通人なりき、然れとも此の粹と通とを善用したる

廻らし、或は入て取らんと思ひ、或は繩を付て繋ぎ留めんと思ひ、終に五百の猿は、手を繋ぎ足を繋ぎなごして、漸くに深き深き谷の池に浮べる月まで達した、處が何ふしたはづみか、空の樹のもとの手足がはづれて五百の猿は諸共に、深き深き黒う澄みたる底の知れぬ谷の池に落ちて、あわれ水の藻屑となつてしまつたと云ふこととあります、これは水中の月を天の月と思ひ誤つた猿知恵で、大事の大事の身命を失つたお談してある、音義上廿二僧祇律の七、或は天台大師の三大部に出てあります、

天の月は一つて、その影は、須磨の月ともなり、舞子の月ともなり、明石の月ともなり、嵐山の月ともなり、田毎の月ともなり、谷の池の月ともなり、瀧酒たる東籬の下、青叢覆郁花に結ばる浄き白玉ともなるのである、

水中の月は迹門で、天の月は本門で、本迹の相違勝劣は天月と水月との如くである、敎相の上に於ても、法跡の上に於ても、題目の上に於ても、敎主の上に於ても、弟子の上に於ても、國土の上に於ても、戒の上に於ても、總ての敎義の上にも、本迹の勝劣あることを知らねばなりません、これ安心立命成佛得脱の資糧であります、安心立命とは現在の成佛て即ち部分的成佛であらふ、眞實の成佛得脱は靈山の成佛て、即ち全分的成佛であらふ、其部分にしても全分にしても、安心立命成佛得脱は、本門善量品に限るのである、

なりき、今日吾人が敎家に妻帯の資格ありて認許するものは實に眞宗の寺院制度のみなり、他は悪言すれば、自然の本能を満足せんが爲め、墮落の妻帯を敢てしつゝあるもの、滔々然らざるはなし、豈に憤まざるべけんや、是を要するに敎家の妻帯問題は、人生の必然にして、最も肝要の事たるや論なしと雖も、事實は事實として考究せざるべからず、而して事實に於ける妻帯は今日到底成功を求むべからず、茲に吾人の切に渴望するところは速に今日の寺院制度の革新を促し、かゝる弊風を一掃して、社會風敎の維持者たる敎家諸君が進んで、模範的妻帯、模範的家庭を建設せられんこと是なり、

本門と迹門

憲 洪 院

往昔山中に、五百の猿が住ひて居りました、數多の猿が住ひて居る位ひの山でありますから、深い谷は地を帶り、餘の形ちは懸もて穿ち、高嶺は天に朝し、崗嶺の勢ひは刀もて削つたやうで、人馬も通はぬ峻嶒な深き山奥であつたでしょう、頃は葉月の望の夜に、研き光らしたる明鏡の様な月が、谷の池に麗しい影を宿して居りました、それを視たる猿は大層に喜んで、何んとかしてその月を捉へたいと、色々智恵工夫を

本門とは、本覺の法門、または、本處の義と申して、覺りの根本一切の法門の源の意味であります、迹門は木の影の如くまた足跡の如く、昨年の曆の如く、春の藥は秋の藥とならずとて、迹門は時に非らざる藥の如く、根なし草の波の上に浮べるが如く、珠のなき山河の如く、魂のなき人の如く、主人のなき家の如く、大王のなき國の如く、また萬民の如く、日月のなき世界の如く、凡て信賴の意を惹起すことを得ざるは迹門の敎義であります、

本門でなければならぬこと、其肝要なることは、宗祖及び六老僧九老僧中老僧等の諸先哲の創立になつた、寺の寺號を見ても別るであらふと思ふ、身延山を久遠寺と云ひ、池上を本門寺と名け、中山をもと本妙寺と號したりしと、京都に、本國寺あり、立本寺あり、本涌寺あり、本隆寺あり、本禪寺あり、本満寺あり、本法寺あり、本能寺あり、小栗栖に本經寺あり、下總に、本土寺あり、日本寺あり、上總に、本國寺あり、駿州に、久遠寺あり、本門寺あり、本覺寺あり、越後に本成寺あり、尾張に、本遠寺あり、品川に、本光寺あり、佐渡に、根本寺あり、この外まだ澤山あれを畧して置きます、寺號に皆々木の字が名づけてあるのは、本門の肝要なること顯はしたのでありましょふ、

そも、爾前の圓と、迹門の圓と、本門の圓と、其形式の上に於て、相似たりと思ひ誤れるは、猿知恵にてありしか、爾前

の圓と、連門の圓と、本門の圓と、重々の相違ありと知らねばならぬ、爾前は星の光りの如く、連門は月の光りの如く、本門は日の光りの如く、其廣狹大小明不明の相違勝劣がありす、

眞の安心立命は、水中の月の如きは駄目で、眞實なる、精確なる、最上至極の天月、即ち本門壽量の大本尊に、滿腔の熱誠を捧げて、眞摯なる、大信仰大依頼心を惹起し、大慰安を得る可しである、時に、安心も、立命も、成佛も、得脱も、自然に得て、悟の都に遊ぶことが出来るのであります、

小久遠陀羅尼

覆面冠者

其三

「御母様、御母様、」

母をよぶは經應なり、時は正に午前十時、昨宵の雨、名残なく晴れて日の光うら／＼かなり、經應は今臥床を離れ出たるなり、昨夜深更まで書籍をとりよせて何か調べものに餘念なかりし彼は、思はず熟睡して今漸く起き出つ、

「御母様、」

來りしは下婢のお總なり、

「奥様は只今廣小路まで往しつたので御座います、お起遊

れたる心地して、速に佛前に跪きつ、

母は經應がとり散らしたる書籍を一所へ集め、炭を二つ三つ火鉢に添へ、湯を沸かすべく用意したり、

經應はやがて佛前をすべりて母の前に座りつ、

「御母様廣小路の方は如何でした、」

「なか／＼お前承知しないよ、」

「困りましたな、今伯父さんからも手紙が來ましてね、」

かくて手にとりたるは二通の内友人より來りし方なり、

經應は次の一通を母に見せて其氣色を伺へり、

「伯父さんも、なか／＼逃げ方が上手ね、」

母はかくいひて、其手紙を經應に渡しつ、

「何分御母様、二百圓の金ですから、そう／＼ちよつと出来るものでもありますまい、然し先方も随分強欲な事をいふの

てはないでせうか、」

「其がさ、静子を彼家へ連れて往た時の様な、榮へて居るんなら先方も強欲な事をいふまいと思ふけれど、大層あの親父が相場で失敗して、今ではひどく寂びれて居るんで、それで、親父はまだ静子を可愛がつて居るのだけれど、母親が時々柳橋へ出すの、新橋へ出すのつてさわぎ立るもんだから、親父も全く氣が氣でないんで、家が苦しくはあるしうれこれするもんだから、遂其氣になる時もあるしするから、今度の様な事にしてはッて、母に話しに來たのてね、うれて、」

ばしたら、是を差上げつてお申附て御座いました、」

お總は二通の手紙を差出しつ、やゝ其處をすべらむとせり

「總、何か甘味ものはあるかね、」

「おは、貴郎の御好きなものは今朝奥様が、ちやんと調度てお置きになりました、」

「あアそう／＼昨夜御母様に御約束して置いたのだ、ては飯を早く、」

幾年月を書生生活に送りし經應は、其身の僧形にあるもち忘れて、言詞の使ひ様まで袴穿ちたる時代のそれと、異ならざりき、

經應が手紙を見つゝある間に、お總は朝の食膳を運びつ、忙がはしげに歸り來りし經應が母の芳子、歳の頃四十路を四つ五つすぎたりけむ、夫の死に逢ふて一人の和子を女の手一つに斯くまで生ひ立てつ、其苦心の跡は顔の其處此處に現はれて、心の裡を察せらるれ、されど亦何處やらに微笑と満足との面影のちらつくぞ流石に信仰ある人の平生なるよ、

經應の食膳を臺所へ運ぶお總とすりちがいて、母は經應の室へ入り來りつ、

「まあ今起きたのかへ、そして御勤行は了つたのかへ、」

「イヤ御勤行はまだでした、」

「うけません、早く御佛前へ御進みなさい、」

母の調子はげに嚴かなり、經應はふと或何物かに呼び覺さるる豊かなる家へ乞はるゝまゝに里子とにはあらねど遣はせしは、最早二十四年の昔なりとよ、吾は二才妹は一才にして、互ひに無心に別れたるなりとよ、何故と母に質せば、母の乳にては足らざりしゆゑと計り、それなれば乳母はなせ置さ給はざりしやと問ふはせの才覚も出せず其儘にしてやみしが、此話ありてより吾は始めて妹あるを知り、母は亦、今更に熱して、狂して、妹静子の引取に苦心し給ふなり、何事も母には孝心深き經應、母の苦心を見、更に新に知りたる妹の身の上を思ひやりては、いかて其身安閑として居らるべき、書生生活を脱して、まだ實世間の風に當らぬ頭腦は、尠なからず新たに家庭に湧ける問題の爲に使役されたり、

「静子も、お前、全く可愛相だね、」

經應獨り思ふやう

「さげば静子は吾妹なりとよ、まだ幼かりし時、日本橋の

「それですとも、静子も可愛相です、」

「それで、お前、今日の結局の話が、今日を退けて五日間の内に返事してくれろといふんだがね、」

「五日間、大分切迫したてはありませんか、」

「妻が十日間つていつたけれど、さうしても、母親がさかない、藝や何かを仕込だ廿四年間の養育料にや、安いもんだつて、いふんだよ、羨しも餘まり憤然としたから五日間に乾度

「静子を引取るついでに來ました。」

「屹度、引取つて、おいひなすつたんですか、」
「經應は思はず母の顔を注視せり、母は今更ながら大膽にいひ放ちたるを苦にせり、然しながらかくてやむべきものにあらし、」

「御母様、」

「はい、」

「僕がもう一度、伯父さんの處へ往つて來ませう。」

「そう、それでは、そうしておくれ、」
母は何か土産をといひて立ちつ、總は車を早くどの命の下に櫛の落ちたるを知らずいでゆきぬ、

かくて仕度して出てゆく車と入りちがひて、薄紫色の被布に白きリボンを頭にさしたる美しき令嬢は、往生院へ來りぬ、車上の人と互ひに敬しく黙禮しつ、下婢のお總は、逸早く認めたり、

「あら奥様、鈴川様の御令嬢が入らつしやいました、」

今玄關を閉めたる計りの芳子はお總があはたしき聲に忽ち開けつ、と見れば鈴川の澄子なり、

「まあ、澄子さん、さあどうぞ、」

澄子は其黒眼勝の顔に微笑を浮べて軽く會釋して打通れり通りし室は今まで經應と母とが對座したらしき室なり、芳子は次の間より油禪の座布團を持ち來りて、切に澄子にすゝめ

が出來ましてね、」

「芳子は、一寸息をきつて、」

「そう、そういへば、今日は格別お美しう御座いますよ、」

「あらいやです、伯母さんあんな事仰つて、おほ、」

芳子も微笑めり、芳子の澄子を稱へたる言詞には、吾娘静子の姿はこもさざりしか、さなり、ろはこもさざりし、されど静子澄子の其人品其容姿を思ひ比べる程の意味はこもりたりき、美しくして、氣高く、何となしに凜乎としたる處はの見える澄子に比して、吾娘の静子の十四年を町家に生ひ立ちて、如何に遊藝は仕込たりとはいへ、其氣品に於て如何なるべきとは澄子の氣品に渴仰したる芳子が、此時の思ひわづらひなり、

無心の澄子は、羽佐間母子が如何にも自分を好遇するものと思ひ、經應を通じての思ひは、芳子を亦となく嬉しき人と思ひぬ、

「伯母さん、近頃、何か御心配が出來ましたの、」

「そうですね、經應の妹の事に就きましてね、」

「あら伯母さんに、まだお在なすつたんですか、」

「はい、ありましたのよ、一才の時に外へやりましたのが、今度引取らねばならん様になりましてね、」

澄子は、今、先程より芳子の言詞に疑問を抱きたりしそれが、名残なく説明せらるゝなり、語るも聞もいと熱心なり、經應は、まだ歸らざりき、

つ、

經應との話の間に沸き立ちし湯は、今新來の客澄子に向て、茶を呈すべく芳子の手は暫し忙しかりき、

「伯母様、せうぞ、おかまい遊ばしますな、」

かくて澄子は色美しき林檎の籠を、何とはなしに此平和の満ちたると覺しき家庭に捧げたり、

「まあ、美麗な色、經應が歸りましたら喜びませう、せうも難有う御座います、」

千萬言の感謝の言詞より、かゝる一句は澄子にとりて此上なき満足なりき、

「今日はどちらへ往らしたつたので御座います、」

「本所の伯父の處まで參りましたので、矢張ね澄子さん、人は夫相當に苦勞のあるもんですよ、」

芳子は思ひ出したる様に立ちて、美しき菓子盛りたる皿を澄子と自分との間に置きつ、障子を開けてや、狭からぬ庭の景色を見せなどすれば、晩春の庭をそよ吹風は温かき日の光をくぐりて、靜に二人の居間をおとづるゝなり、

「澄子さん御氣分は如何で、」

「近頃はね、大分快方で御座います、」

「うう、それはお結構で、此間經應が伺ひました時なぞは、餘りお宜しい方ではなかつたのでせう、委くしも一寸伺ふと思ふて居たんですけれど、此間から少し離すに離されぬ用事

其 四

青葉若葉の陰涼しく、曉かけて時鳥の鳴く今日此頃ぞ、人の心も亦移り變るかや、げにそれよ、一昨日の晝、ふと往生院に羽佐間母子を訪ふて、心使ひなき羽佐間の母が氣質に、此の日頃の胸の煩悩は名残なく消へ去りて、結婚を強ひたまへる母の言詞も少しは胸に止まらざりしが、さるにても、亦安からぬ思ひ消へたりとはあらず、とやせん、かくやせむと思ひ惱めるぞ、亦なくあはれならずや、

澄子が驚きは繼母が強制結婚談のそれに止まらて、羽佐間經應に妹あるといふ一事なり、されど此驚きは直に喜びの情を伴ひ來りぬ、快活にして邪氣なく、慈愛深き母と、雄々しくて、熱誠に富める經應との家庭に入るべき妹とは、如何なる人格なるべき、定めしやさしくて、情深く、よし町家に育ちて、華美な處あるとも、そはむしろ其妹の人格美としてうつくしからずや、老ひ給へる母様と血に富みたまへる羽佐間様と、やさしき妹とが一つに成りて、往生院の家庭を飾らば梅、桃、櫻、一時に綻びたる風景を呈せずや、ううして羽佐間様吾を澄子とよび給ひ、妹静子が吾を姉様とよぶにいたらば如何なるべき、女流の間に友を得ざりし澄子は、たゞ見ぬ静子を友としての交り、妹としても愛し、其圓滿なる愛は男性に向ふ一面をとりさらば、餘る分の總てを友としての、妹とての静子に傾けんとせり、

猶みありし澄子の人生に新たに門を開きて、慰藉の光明を

放ちたるは羽佐間なり、そうして此恩籍の聲は廿三年の今に到るまで、曾て一度も湧かざりし澄子が心の、奥の、奥の、神祕の血を呼びたり、血は何とはなしに美しき聲を出して答へたり、恩籍、光明、そうして羽佐間澄子はいよゝゝ戀にあらがれたり、

「二百圓」

澄子は覺へず、聲高にひひ放てり、

「おほ、御令嬢、二百圓がどうなすツて、」

「あれ、誰方、」

「はい、妾ですよ、」

「まあ、いやだね、突然に、」

「だつて先刻から、あんなにお呼び申したてはありませんか、」

「少つとも知らなかつたわ、」

「何かお嬉しいことでも思つて居らしたんだわ、乾度其爲よ、」

「あらあんな事いふて、おほ、」

「今誰も不在だがね、ちよいと其鏡臺を、」

「どちら、此方ら、」

こは理髪のお常なり、束髪を平生好むにはあらぬ澄子は、時々疏さてうつくしき鬘を結ふ時もあるなり、

「ほんとうに御嬢様はお美しくつて居らつしやるよ、此間もね、貴女のお歸りをあの三公が見ましたんだとさ、歸りましたら、」

を見るまでには餘りに若し、二百圓の金の苦心は、一昨日羽佐間の母より親しく聞きたる處なり、それが爲、今日經鷹を伯父の所へ走らして、心配するなりといひけるよ、ううして午後三時頃に經鷹が歸り來りての話は、伯父の話の極めて不得要領なりし事、結局が來月に成つたらばどうかも知れんといひし事、話はそれのみにて母の芳子は不満足にきゝとりしが、經鷹も何やら物足ぬ心地したる様なりき、澄子は此母子の間に新たに湧きたる心配の爲に、尠ならず心を傷めしか、經鷹が快活に雄々しくも、母に向ひて心配無用、我にも友人あり、それを話したりとて差支もなき友人あり、明日は疾く起きてゆかばやといひしに、母の芳子と共に澄子も氣強くなりたるなりき、澄子は獨り思ふやう、

羽佐間様の昨日の様子は如何なりし、下婢が庭を掃く時の問はず語りに、斜向ひの羽佐間様は、今日何方へ往かれましたとの報せ、さては昨日の結果はあしくて了りしか、昨日、一昨日、さては今日此頃の羽佐間様は如何に心配したもうやらむ、畏敬、信仰、平和なれ、美麗なれ、安くましますと念じまひらする羽佐間様に、新たに心配湧きたりとすれば、吾が心霊は何の苦痛も感せずしてやむべきか、少くともそれを分ちて互ひに心配するの苦痛は、むしろ一の樂みにあらざるべくや、ましてや吾がため、故父の爲めには、一方ならぬ同情を湛へ給へる恩人なるに於ておや、故父の學説を評論して

てから、まあ一倍い讀め方、其處へ貴女恰度若いものが五六人よつて來ましてね、貴女のお噂が一層高まりましたんですよ、

「常はもう平生もあんな事いふて、今度は御母様にいひますよ、」

「そうおいひ遊ばせ、其御母様も貴女の其御容姿ですから、早く落附方を決定たいつて、御心配あそばして居らつしやるわ、然し貴女、二百圓つて何て御座います、」

「二百圓つて、」

「はい、その事、」

「此丈のお金があれば、妾しのお朋友を救ふ事が出来るのよ、それでね其を思つて居たもんだから、ついでね、」

「それでは貴女は、其お朋友をお救ひ遊ばすの、」

「だつて、お金がなくなつては、」

「もしお金があつたら、どうなさいます、」

「あれば、いゝわ、」

「あるだらうかね、」

「それはね、貴女の御心次第で出來ますよ、」

「妾しのお心次第で出来るの、」

「出來ますとも、それん計りのお金位、貴女、」

澄子の心は動きたり、まだ世なれぬ澄子は、人の言葉の裏隠れたる光明を新たに放ちたまひたるも羽佐間様なり、其隠れたる光明のために、鬱し、結ばれたる吾の煩悶を、解きて、ほゞきて、慰めて、新たに生命を興へ給ひしも羽佐間様なり、それよ二百圓若出來るならば吾ための恩人に捧げたし、故父のために光明を放ち給ひたる恩人に捧げたし、吾煩悶を解きて、ほゞきて、慰め給ひて、吾が信仰を呼びさましたまひたる其人に捧げたし、

澄子の心は動きたりき、

「常、お前、それは眞實、」

「眞實ですとも、貴女、何なら今夜一寸妾し方までお出遊ばせ、能く御話いたしますから、」

「ではね、往くからね、何時頃、」

「日が没りましたら直でも能う御座いますわ、宿も其時分歸りますから、恰度都合がよう御座いませう、」

「うれては、其時分に往くからね、」

常は、あはたゞしく立去れり

澄子は、嬉しさ、喜ばしさ、更に赤心のさはがしさ、

夕闇の空に、星、三つ、四つ、二つ、繼母はまだ歸り給はぬなり、運ければ麻布へ廻るといひ給ひしが、さては廻り給ひしか、下婢のお高は湯にゆくといひしが、餘りおそきや、

...

「さるにてもお常と約束せし時刻はとくすぎたらずや、澄子はどつおひつ、玄關をあけて門に出てつ、それと決して雪駄の音、鮮やかに、身はくるり千束町の方へ、

お高は遠くよりそれを見て歸りたり、

澄子はさばかりしき心を抱ひて、うれしき心を抱ひて、千田熊吉の家へ来りつ、お常の家なり、夫婦はにぎやかに迎ひたりき、

「御嬢様お初にお眼にかゝります、私や熊吉と申します、女房が始終出まして何かもう戴くばかりで難有御座います、」

「いえ、何もね、さうかよろしく、」

澄子の言詞は、簡單なりき、

「お一杯召上げ、失禮ですけれど」

お常は杯を差しつけつ、

「常、妾は戴けないよ、」

「おは、然様でしたッけ」

お常は氣味悪く笑ひぬ、さうして夫婦は二つ三つ言詞を交しつ、

「ではお前さん、都合が好んだね」

「ううさ恰度それ明日岐阜へ出發うと思つたもんだから、今日晝の中に往つて持つて来て置たんだ、話さへ出来れや今でも渡すさ。」「話は後でも好いわね」

「然しあの方は、大丈夫か」

「大丈夫、妾が讀んで了つゝゝるんだから」

「おいちよいと一杯注いでくんねへ、」

「おは、御嬢様の前で餘り遠慮が無さすぎるよ」

お常は徳利を手にして、片手にて洋燈の火を細めつ、

「なにね御嬢様、此は外の話ですがね、それぢや、お常、二百圓の方は御貸申すとするか」

「あアさうしておくれ、御嬢様あなた判が御座んして」

澄子は紙入を探りてそれを出しつ、一枚の證文は熊吉の手よりお常の手へそれより澄子の手へ渡りぬ、それは借用證文なりき、澄子はそれ印を捺しつ、

二百圓その金は澄子の手へ明白に渡りぬ、

澄子はうれしさ、喜ばしさ、更に亦さはがしさの心にまし、吾身ながらに餘りの大膽さに暫し恐ろしき心もおさつ、

表の方は今人の山を築きて、何か諍ふなり、さげば書生と醉狂者との喧嘩なりとよ、熊吉夫婦がそれを見るについで、

澄子もそゝろに軒端に立てり、

やがて喧嘩は巡查の聲に收まりつ、右往左往に散りゆく人の中より、相手方たる書生も立去るなり、

「あッ羽佐間様、」

澄子は鮮やかなる聲にて呼びとめたり、熊吉夫婦は其處には居らざりぬ、

「まあ、今のは貴郎、お怪我はなかつて、」

「澄子さん、貴女は、さうして茲處に御出です、」

「少し用事が御座いますして、」

「眞實に、御怪我はないんですか、」

「別に御座いません、醉狂者が突當つたもんですから」

「まあ、それでも、よう御座いましたこと、」

羽佐間のすらりとしたる姿、澄子の飽くまで白き顔は、其處此處の洋燈に照し出されて、聞き軒端の二人はおりゝ途ゆく人にながめられつ、

「羽佐間さん、此間からの御話は如何なすつて、」

「妹の事ですか、實は今日も其事で歩いて居つたんですが、まだ何方も満足な返事を得ないんです、それで今さうしたものかと思つて考へて歩つて居つたんです、」

「それだから貴郎は、人に突當られたのでせう」

「は、さうさうかも知れませんが、然し御母様が待つてお出ですから、歸りませう、貴女も御同伴に、」

「いえ、妾、今まだ此家に用事が御座いますから、あの羽佐間様、貴郎、失禮ですけれどお金で御座います、妾、御用立致して置ませう」

「あの二百圓をですか」

「は、」

「眞實ですか澄子さん、……貴女然し如何してそれを、」

「はい別に御不安な金子では御座いません、妾の信用上の金で御座います、如何が羽佐間さん静子さんを早くね、妾くしも餘所事には思ひませぬのですよ、」

「二百圓は、澄子の手より、羽佐間の手へ、」

羽佐間の手はわな、けり、獨り思ふやう、さるにても澄子のやさしさよ、親切さよ、吾と母とのみが妹の事に就ては、

心配してあると思ひしに、外にまた心配してありしものもありけるか、さては、さるにても此金、澄子がいふまゝに吾は

一時の用立に供すべきか、今無くては事を欠く金、速に澄子のいふがまゝにすべきか、此金の出所を聞ずして、それを借

りうけて、後日何かの障りは出来ざるべきか、金の出所をさ

く、それは餘り澄子を蔑視するに當らずや、澄子自らは妾の信

用上の金といふにあらざるや、それを強てさくは澄子が信用を

疑ふには當らざるか、よし澄子が此行爲は誠の行爲なり、常

に吾の言論に、十二分の敬意を捧げて、吾の忠告、吾の批評

は喜んで聞き、喜んで受ける澄子の、今吾に對しての此行爲

は、一片の誠をこめたる行爲なり、此を却くるは彼の誠を却

くるなり、若假りに澄子が誠を表白するは、吾の外になきと

して、其吾が其誠を却けたりとすれば、澄子は其誠を他人に

向て表白する程の女性なるか、否斷じて然らじ、澄子の意思

は一貫せり、吾斷じて澄子が眞心をこめたる誠の行爲を領納

して、さうして感謝せざる可らず、

「澄子さん、それでは此金を一時御拜借します、何んとも御禮のいひ様は御座いません、御母様も非常にお喜び爲さるてせう」

「どうぞ、御三人一同に一日も早くね、」

澄子の胸はいと／＼さはがしく、此丈の言詞も打ふるうた

りさ、
「では私はお先へ、」

「あ、ちよいと、此金は貴郎が外で御心配なすつた事にして御母様には黙つて居て頂戴な、」

「よろしい、」

羽佐間の答は何とはなしに勇ましかりき、かくて羽佐間は澄子と別れつ、

澄子は内へ入りぬ、
「御嬢様情夫があるんですね、おほい、」

お常の笑ひは氣味悪るし、
澄子の歸るといふを時の遅きに托して引留めつ、明日常自身が繼母に謝せんといふにあり、澄子はいひ甲斐なく引とめられつ、

お常と澄子が朝の食膳に向ひたるとき、先刻より見へざりし熊吉は歸り來りぬ、

「如何も飛んだ事が出来てしまつた、御嬢様ひどく繼母様がお怒んなすつて、親の顔へ泥をぬる白癡者だ、故父様の位牌を踏付た仕方だ、嫁に往くのを嫌つて情夫と一跡になつて身を沈めるなんて、言語同断の莫連者だつて、それは／＼大變な御立腹ですせ、此印形だつて此が此迄の親子の間柄だから、勘當のしるしに捺してやるつて、此後はどうなりと勝手にしろつてつ、」

「まアお前さんそれをいつて了つたのかい」

「言はなくつて如何なるもんか、商賣にならないぢやないか」

澄子の顔色はみる／＼變れり、
果然、澄子は悪魔の手に掴まれたるなり、



雑報

京都通信 川崎臥雲報

▲祖書身讀會 村上貞藏村上勘兵衛富永東一郎氏等の發起にて野口僧正を講師に聘し祖書身讀會なるものを組織し九月十二日宗祖御難會を下して發會式を擧げ毎月五日の妙満寺に於て一般の聽講を許し今や漸次盛大に有之候目下は開目抄の講義に御坐候

▲京都の祝捷會と東郷大將の來京 一時屈辱講和に市中甚だしく寂莫をも感し候ひしか冬の初に絶大の名譽と世界の賞讃とを双肩に擔ひし東郷大將等一行の來京が如何に時ならぬ花を平安の都に咲かしめ候ひし事よ、十一月廿五、六、七の三日間は轟る國旗、軒端にかざす提燈に夜も晝とまごう計り萬歳の聲歡呼の響真に前代未聞の盛事にて候ひき、我本山も廿五日朝山内一同信徒盛裝して門前通過の大將を歓迎し尙十時より奉告法要を修し祝賀の爲め祖師堂に清正公朝鮮征伐の旗曼陀羅及安珍清姫の梵鐘等を飾り一般の觀覽を許し申候

▲東郷大將に法華經贈呈 翌廿六日午前七時本山一統近末僧侶及信徒車を馳せて東郷大將を也阿彌ホタルに訪問し親しく而接して法華經一部を贈呈致候處大將亦喜んで之を受けられ申候

▲京都婦人報國會の大追吊會及解散式 開戦已來本山に事務所を置き東奔西走盛に活動したる同會も今度平和克復に際して十二月一日午後一時野口僧正を導師として滿山の僧侶十數名を招いて戦病死者英靈の爲め尤も嚴肅なる追吊法要を修し軍人遺族參拜者三百名に對して供養物を配ら茲に目出度解散の式を擧げ且つ紀念として妙満寺境内に報國櫻三本を植へられ申候

岡山通信

▲例月演説會 も其後次第に擴張し廣告を配り淫祠邪教の撲滅を期し盛んに活動致し居申候先はあら／＼近狀御報道上候々々

例に依り篤信會の演説報告仕候去る十月廿日午後七時より山崎町本行寺に於て開催致し候當日の辨士及び演題は
開會の辭 松崎事成
人生の目的は何ぞや 松崎事成
不受不施に就て 松崎事成
法華經と基督敎 松崎事成
十一月八日同寺に開會致し候當日の演題及び辨士は左の如くに候
開會の辭意 會員
日蓮上人の人生觀 松崎事成
佛敎世界論 山本容廣
戰國の宗教 松崎事成

美作通信

去る十一月三日天長の佳節に宗教的會談を催したる勝田郡湯郷村本宗信徒鳥越勘一君は去る十二月四日その自宅に岡山市本行寺主僧能仁事一師を請して宗教談話會を催せりその際須南湯郷尋常高等小學校長を始め村内知名の人士會同し多大の興味を感受したり、翌五日は在倉敷英田郡長妹尾經時氏を始め官僚數名午後六時より會同し能仁師と妹尾郡長との間に種々重要な質議應答ありて十時半漸く閉會せり今その要を擧ぐれば第一宗教の要否、靈魂の滅不滅、倫理と宗教の關係、敬神と神參との異目、謗法の意義、本迹の定義、經典と題目との異目等にて頗る有益なる講話なりき、能仁師の快辯喜ぶべく僱主の篤信感ずべきなり

岡山祖書講義會

十一月二十日より同三十日まで十日間岡山本行寺に於て毎

日午後七時より信徒須山茂三郎氏の發起にて能仁師を講師として祖書講義會を開催したり今其詳細を横山南山氏より報道せられたるが全文は後日に譲るとして取敢へず簡單に其模様を報せん十日間の講筵は日々盛會を以て終りたるが講題は能仁師の立正安國論及び松崎師の初心成佛抄にて特に滿講の日には能仁師の發意にて聽講者の領解談を爲さしめたり當夜一同に須山氏より茶菓の饗應ありたる後能仁師の訓誡あり了て松崎師成、菱川十一郎、能仁一十、久城三號、宇垣宇三郎、三宅壽二、後藤幾太郎、高橋靜馬、竹中清一、小野荒太郎、小野芳治郎、宇垣長四郎、山海明八郎、岡崎岩吉、草野松三郎、磯島品造、久城一號、高木とく諸氏の領解談あり最後に萬歳を唱へて散會せり

尙開期中參聽せし諸君の氏名は左の如し同地方に於ける近來の盛事といふべし

- 開會以來之聽講者姓名 (順序不同)
- 松崎師成師 上田日久師 安原金十郎氏 能仁一十師 宇垣長四郎氏 宇垣宇三郎氏 久城多吉氏 三宅壽二氏 三好増造氏 藤原壽二氏 坪田坂造氏 井上幾次郎氏 有松徳次氏 小野芳次郎氏 具原幸四郎氏 松田岩吉氏 須山茂三郎氏 進喜久治氏 横山藤吉氏 横山鐵太郎氏 今井松枝氏 高木とく子 今井母某 吉田榮子 城島ひさ子 佐々木かた子 城島母某 高橋靜馬氏 森田彦衛氏 片岡正光氏 能仁榮子 松田岩吉妻某 磯島品造氏 見島政吉氏 坪田久造氏 小川直衛氏 岡高明氏 山海明八郎氏 戸川建一氏 戸川小十郎氏 人見理作氏 人見喜三次氏 菱川十一郎氏 草野松三郎氏 城島作太郎氏 松岡宗太郎氏 野村もと子 河原治男氏 小野荒太郎氏 矢部省三氏 久城登羅子 岡本龜吉氏 後藤幾太郎氏 大林より子 長坂義三郎氏 藤原政吉氏 横山體琳師 竹中誠一氏 廣谷忠人氏 石谷幼輔氏 齋藤枉吉氏 岡根馬次郎氏 有松

- 花子 有松小仙 橋本昌平氏 吉田想平氏 田中敏氏 久城この子 三田常次郎氏 中田清藏氏 大村彌吉氏 宮本慶雄氏 吉岡佐源次氏 佐藤はす江 須山しも子 狩谷銀三氏 近藤義平氏 長坂しま子 山内紋三郎氏 佐野幸吉氏 佐野秀雄氏 佐野さわ子 板野常三郎氏 岡崎岩吉氏 野上きと子 三田よし子 横山悦子 横山清子 横山龜子 鳥居正之助氏 鳥居とわ子 眞代觀了師 磯井多賀造氏 増岡はる子 菊地彌一郎氏 山田芳松氏 横山静子 横山享吉氏 石村徳太氏 内田關松氏 三田りん子 久城茂太郎氏 佐藤明治郎氏 藤原淺吉氏

基礎金領收報告

一 金廿八錢也
右寄贈相成忝く領收仕候也
岡山市新西大寺町
小松原熊太郎殿

統一團

各位益々御清昌奉賀候陳者歳末決算之都合も有之候間購讀料御拂込の諸氏は何卒此際至急御送付相成候様願度此段特に御依頼申上候也

統一團會計部

購讀者各位

明治三十八年十二月

村雲尼公殿下御題字
日蓮宗各派管長序文
大僧正本多日生師著

法華經講義

◎序説◎第一章 緒言◎第二章 法華超勝の教義◎第三章 諸種の法華經觀◎第四章 天台の法華經觀◎第一節 三種教相の綱格◎第二節 十雙權實の巧釋◎第三節 六重大迹の主旨◎第四節 三法々鉢の解釋◎第五節 待絶二妙の解釋◎第六節 一念三千の妙觀◎第五章 日蓮の法華經觀◎第一節 本化別頭の教相◎第二節 但令用實の活斷◎第三節 應身常住の妙義◎第四節 佛界緣起の妙旨◎第五節 究竟圓慈の活釋◎第六節 聲色爲經の眞義◎第七節 唯一本尊の光顯◎第八節 信念成佛の要道◎第九節 兩善一貫の活論◎第十節 台當教相の異目◎第十一節 身讀法華の壯觀◎第六章 天台講經の要義◎第一節 四教五時の統釋◎第二節 五重玄義の妙解◎第三節 法華釋經の科段◎第四節 悉檀運用の活釋◎第五節 文々四釋の廣解◎第七章 日蓮講經の要義◎第一節 日蓮上人の學風◎第二節 本化獨特の五玄◎第八章 法華傳譯の概略

目次

◎釋文◎科段◎來意◎大意◎入題◎文々解釋◎通解◎妙解◎異解◎批判◎質議◎解決◎字義◎參考◎讚唱

妙法華經は佛教教義の帝王なり亞細亞文明の樞軸なり世界群籍の寶典なり古今の哲匠苟も一宗一家を立てしものにして曾て對法華經の見解を有せざりしはなく互に嬋妍を競ふてそが龍賁虎鬪の論戰は實に佛教史上の一異彩なり苟も佛教を知らんとならば須く先づ法華經に來るべし百年大藏に没頭せんよりは一日法華を研鑽するに若かさる也。曾て天台智者釋經に心血を注ぐあり爾後の釋書は言ふに足らず更に日蓮上人は本化別頭の教觀を開示して妙經の統歸を示し給ひぬ。法華を學び法華を轉じ法華を信じ體達せんとするもの佛教の人身觀宇宙觀道徳觀佛陀觀等に就て正知正見を得んとするものは必ずや天台に鑒み日蓮に學ばざるべからずこれ本書の起る所以にして。著者は多年法華經の奥旨を専攻してその學道統を傳へその見稟承あり日蓮上人を忘れたる從來幾多の註書に慚らす即ち廣く三國の諸家を參照しうか藪蓋の妙義を傾倒して今茲にこの著あり。

和裝帙入全八冊紙數凡一千八百頁
定價參圓八拾錢 小包送料貳拾錢
出來期限 明治三十九年四月一日

本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置
さあれば其廣告は全國の公衆一
般に知らるゝ便宜あり

